

二〇二三年度
学校推薦型選抜
適性検査II

一 問題文を読んで次の問一〜問十に答えなさい。解答はすべて楷書で所定の解答用紙に記入しなさい。

近代の笑いの理論の最後の第六の理論は、人間の自由を獲得するための批判的な笑いの理論である。人間を抑圧するものを批判する笑いによつて、解放という効果が生みだされるのである。^(注2) カントやマルクスの^(注3) いう意味で、批判という営みが社会のうちの抑圧を批判し、自由に生きるための場を確立することを目指すものであるならば、笑うことによつてその主体が自由になり、心の病から癒^(注4)されるのであれば、こうした笑いには **A** 要素が含まれていると考えることができるだろう。

こうした笑いの理論を代表する思想家はニーチェ^(注4)である。この節では、さらにニーチェにとつて笑いがいかに人間を自由にするものであるかという視点から考えてみよう。ニーチェにとつて笑いは、社会のなかでの解放を実現するための手段であるとともに、伝統的な思考の枠組みのくびきから解放されることによつて生まれる結果でもある。まず笑いは、自己への批判によつて、社会の旧来の善悪の観念のくびきから解放されるために役立つ。^(注5) 『悦ばしき知識』の第一書は、こうした笑いへの称賛の言葉から始まる。

ニーチェは、人間たちを^(a)コウソクしている善と悪の^(注6)カテゴリーは対立するもののように思われたとしても、どちらも人間の種の存続のためという目的にしたがつて定義されていたのではないかと指摘する。善がそうであるように、「他人の不幸をたのしむ意地悪い悦びとか、掠奪欲^(注7)とか支配欲、そのほか悪と呼ばれるあらゆる本能、それらは種族保存の驚くべき^(注8)経済の一部をなすものだ」と喝破する。^(b)

ニーチェによると、このことに気づかせてくれるのが、笑う者なのである。道徳について、良心について、宗教について真面目な顔で語る人々、「良心の呵責^(注9)と宗教戦争とのあの教師たち」は、人間を生に固執させ、伝統的な善悪の概念のくびきへの隷従を強めるばかりである。真に求められるのは、こうした真面目な営みを心から嘲笑する笑う者なのだ。

必要なのは「個人としての諸君を全く完膚なきほどに嘲笑できる者」であり、「諸君が蠅^(注10)や蛙^(注11)のような無限に惨めな存在だと

いうことを、それが真理だと思いきまされるぐらいしたたかに、諸君の胸に叩き込むことができるような者」である。そしてこの者は「十全の真理からして笑うとすればそうも笑うだろうように自己自身を笑う」者であるだろう。

このような笑う者が登場するとき、初めて「笑いが智慧と結ばれるであろう、そしておそらくそのときは〈悦ばしい知識〉だけが存在することとなるだろう」。『悦ばしい知識』は、こうした笑いと結びついた知識をモサクする書物である。「笑いにとつてもなお未来というものが必要である」からだ。

それだからこそ、最後の人間を超える超人を予感させるツアラトウストラは哄笑するのだ。「ツアラトウストラは予言する。ツアラトウストラは笑って予言する。がまんできない者ではない。絶対者ではない。縦に横に跳ぶことが大好き」な者なのだ。

ツアラトウストラは、この超人にいたる **B** の過程において、大いなる笑いが不可欠であることを強調する。永遠回帰の思想を予感したツアラトウストラは、道路に羊飼いが横たわっているのを幻視する。この羊飼いの喉には蛇が入り込んでいて、彼に噛みついていて。ツアラトウストラは、「噛み切れ！」と叫ぶ。そして羊飼いはこの助言にしたがって蛇を食いちぎる。そして変身する。

「もう羊飼いでではなかった、もう人間ではなかった。変身して、光に包まれていた。そして笑った。この地上でこれまでどんな人間も笑ったことのないような笑いだった」。

X その笑いが訪れていないツアラトウストラは、この笑いに憧れる。「その笑いへの憧れに、俺は蝕むしばまれている。おお、どうやって俺は生きることにも耐えるのだ！」。

このように笑いは、ニーチェの哲学の核心のところにある。ここに描かれたような超人の認識、超人への認識のプロセスとしての笑いを別としても、ニーチェにとっては笑いは多くの場合、解放の帰結であり、幸福の現われである。ニーチェは無意味な笑いを称える。「無意味なことへのよろこび——いかにして人は無意味なことによるこびをもちうるのであるか？ つまりこの世で人が笑うかぎり、こうした場合があるのである。それどころか、幸福のあるところほとんどどこにでも無意味なことへのよろこびがある」。

こうした無意味なものがよろこびをもたらすのは、すでに考察したように、それが人間を意味の体系のコウソクから解放してくれるからであり、「われわれが通常われわれの**仮借**(d)ない主人とみている必然的なもの」

C

・経験的なものの束縛から、一

時的にわれわれを解放」してくれるからである。この束縛から自由になったときの、空白の一瞬を笑いが満たす。このときの笑いは、カントやフロイト(注11)の笑いと重なるところがある。「期待されていたもの(それは通常不安がらせ、緊張させる)が害を与えずに発散されるとき、そのときわれわれは戯れ笑う」のである。笑いは人を自由にし、自由は人を笑わせるのだ。

この笑いと自由の深い結びつきを語っているのが、強制収容所への収容を体験した**ヴェイクトル**(注12)・フランクルである。『夜と霧』

のなかで彼は、笑いが人々の精神を崩壊させないためにいかに貴重な武器となったかを強調している。強制収容所にはユーモアもあつたと言つたならば驚かれるだろうと認めながら、フランクルは「ユーモアもまた自己維持のための闘いにおける心の武器である。周知のようにユーモアは通常の人間の生活におけるのと同じように、たとえ既述のごとく数秒でも、環境から距離をとり、それを上から眺める場所にみずから置くのに役立つのである」と指摘する。ユーモアは自己を含めた強制収容所というものの全体を批判的なまなざしで眺めるために役立つのである。

そして収容所の仲間(く)の心が挫けないようにするために、仲間(く)に「これから少なくとも一日に一つ **D** ことをおたがいの義務にしよう」と提案したのである。想像できるように強制収容所の生活は、巨大な苦悩をもたらす。その苦悩は心を満たし、やがて心を壊してしまうだろう。それを(え)サけるためには、この苦悩を相対化するまなざしをもつ必要があるのである。

ユーモアの意志をもつこと、それは「事物を何らかの形で機知のある視点でみようとすること」であり、「あらゆる苦悩のある相対化を前提とすることなのである。そしてこの視点に立つかぎり、「それ自身はきわめてささやかなことも最大のよろこびをもたらさう」のだという。笑っているかぎり、幸福と喜びを味わっているかぎり、どれほど苦悩に満たされた心でも、心が壊れることを防げるだろう。

フランクルにとってこの笑いの機能の認識は貴重なものだった。

Y

彼は本職の精神医学者として、この笑いを治療に導

入する。それがロゴテラピーである。この笑いの力によって「患者は神経症を客観化して自分をそこから引き離す」ことを学ぶのである。そして「精神の反抗心を呼び起こすことができる」ようになるのである。フランクルは断言する。「ユーモアほど患者を自分自身から引き離すものはない」。

フランクルは「ユーモアは人間の実存的なものである」とまで主張する。「患者は、不安を面と向かってみることを、いやそれを面と向かってあざ笑うことを学ばねばならない。そのためには笑うことへの勇気が必要である」。そして心に笑いが忍び込んできたとき、「患者はもう賭けに勝ったのである」。自己を含めた世界を笑いのめしながら「ユーモアをとおして患者はたやすく、自分の神経症の症状をどうにか皮肉り、最後には克服することをも学ぶのである」。この治療の手段としての笑いの効果は、わたしたちがこの閉塞された世界のうちで^{つよ}勁く生き抜くために必須の手段である。わたしたちを^お押し潰そうとするものの一切を笑い飛ばそうではないか。

（中山元『わたしたちはなぜ笑うのか 笑いの哲学史』による。出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある）

（注1）最後の第六の理論—— 筆者はここまで五つの理論を考察してきている。

（注2）カント—— イマヌエル・カント、ドイツの哲学者（1724～1804）。

（注3）マルクス—— カール・マルクス、ドイツの哲学者、経済学者（1818～1883）。

（注4）ニーチェ—— フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ、ドイツの哲学者（1844～1900）。

（注5）『悦ばしき知識』—— ニーチェの著書。

（注6）カテゴリー—— 部類、^{はんちゆう}範疇。

(注7) 最後の人間——ニーチェの著書『ツァラトゥストラはこう言った』で、「超人」の対極にある一般の人間のこと。

(注8) 超人——ニーチェ哲学の中心概念であり、人間を超克した完全な人間のこと。

(注9) ツァラトゥストラ——『ツァラトゥストラはこう言った』で、超人の具体像とされる人物。

(注10) 永遠回帰——ニーチェが説いた、この世はすべてが永遠に繰り返すという概念。永劫回帰。えいごう

(注11) フロイト——ジークムント・フロイト、オーストリアの精神科医、心理学者（1856～1939）。

(注12) ヴィクトル・フランクル——オーストリアの精神科医、心理学者（1905～1997）。

問一 傍線部(a)・(c)・(e)の片仮名を漢字にしなさい。

- (a) コウソク (c) モサク (e) サける

(配点6点)

問二 傍線部(b)・(d)の漢字を平仮名にしなさい。

- (b) 喝破 (d) 仮借

(配点4点)

問三 空欄

A

C

D

号を記入しなさい。

に入る最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番

(配点6点)

A

- ① 普遍的な
② 開放的な
③ 伝統的な
④ 批判的な
⑤ 楽観的な

C

- ① 無意味なもの
② 相対的なもの
③ 合目的なもの
④ 客観的なもの
⑤ 空想的なもの

D

- ① 愉快な話をみつける
② 懐かしい思い出を語る
③ 新たな自分を発見する
④ 他者の長所に気づく
⑤ つらい出来事を忘れる

問四 空欄

B

に入る最も適当な言葉を、本文中から二字で抜き出しなさい。

(配点2点)

問五 空欄

X

・
Y

に入る最も適当な言葉を、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を記入しなさい。

い。ただし、同じ番号は一度しか選べない。

(配点4点)

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | のきなみ | ② | あたかも | ③ | まず | ④ | たとえば |
| ⑤ | やがて | ⑥ | まだ | ⑦ | なぜなら | ⑧ | つまり |

問六

傍線部(1)「このことに気づかせてくれる」とあるが、「このこと」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 異なるように思える善と悪の概念は、人間の種の保存を目的としている点で同じであるが、悪とされるカテゴリーには本能としての傾向が高いということ。
- ② 人間たちを縛りつける善と悪の観念は、対立するカテゴリーのように思われたとしても、たとえそう見えなくともともに経済的な豊かさや結びつくということ。
- ③ 人間の心に根深く存在するさまざまな欲望が悪と呼ばれるものであり、そのどれもが人間の種の保存という目的にたがって機能する本能であるということ。
- ④ 善と悪という対立する概念が定義されているのは、ともに人間の種の存続という目的のもとに行われたことなのではないかということ。
- ⑤ 人間にとって対立するように見える善と悪の概念は、どちらも伝統的な思考の枠組みであり、教育という営みによって人間を縛りつけてきたということ。

問七

傍線部②「ニーチェは無意味な笑いを称える」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 無意味な笑いは、伝統的な価値観や善悪の概念をひたすら信じていた人間を刺激し、何ものにも縛られない自由と幸福を求めて、自分たちを縛りつける社会の旧来の観念を批判し抵抗する力を与えるから。
- ② 無意味な笑いは、伝統的な善悪の観念を真面目に受け継ぐ人間の営みを批判し、旧来の価値観の意味に束縛されて生きるしかなかったすべての人間を解放して超人に変身させ、真の自由と幸福をもたらすから。
- ③ 無意味な笑いは、伝統宗教による善悪の意味の体系に束縛された人間を解き放ち、旧来の支配制度で成り立った社会の中で隷従して生きるしかなかった人間を救い出し、自由の喜びと幸福を実現するから。
- ④ 無意味な笑いは、人間の社会に歴史的に長く受け継がれてきた善悪の価値観そのものを揺るがし、人間を束縛する既存の価値観の意味そのものを批判することで、抑圧された人間の不満を解消するから。
- ⑤ 無意味な笑いは、伝統的な善悪の概念に付き従うことを人間に強いる社会的な営みから超然とすることで、意味に縛られて凝り固まった見方に陥った人間を解き放ち、自由の喜びと幸福をもたらすから。

問八

傍線部③「笑いが人々の精神を崩壊させないためにいかに貴重な武器となったか」とあるが、笑いが貴重な武器となったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 収容所のきびしい環境にあっても、その環境に自分たちをおしこめている敵を面と向かってあざわらうことを学ぶことができれば、ぎりぎりのところで自分の精神の崩壊を防ぐことができるから。
- ② 収容所の劣悪な環境やそこから生まれるさまざまな苦悩を離れ、苦しみを忘れ、別の楽しみに思いをいたすことで、ともすればくじけ、崩れ落ちそうになる心を救うことが可能になるから。
- ③ 自分自身の苦しみを絶対化することなく、収容所と同じように苦しんでいる仲間と比較すれば、相対的に自分はまだまだな状況にあると喜びを感じ笑うことで、苦しみに潰れてしまう精神が救われるから。
- ④ どんなことがあっても、とにかく笑っていれば、笑うという行為そのものによって、幸福と喜びを感じることで、どれほどの苦しみにあっても、心が壊れてしまうことから逃れられるから。
- ⑤ 収容所のひどい環境を対象化し、その環境やそこから生じるそれぞれの人の苦しみをユーモアの視点でみようとしたり笑うことが、幸せや喜びをもたらし、心が壊れることを防ぐから。

問九

傍線部④「ロゴセラピー」とはどういうものか。本文を踏まえて五〇字以内で説明しなさい(句読点を含む)。

(配点10点)

問十

本文の内容と一致するものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 良心やモラル、神への信仰など善の観念を否定することで、人間は生への固執から解放され、真の自由を得る。
- ② ニーチェは笑いを理論の核とし、誰もがこの世のすべてを自由に笑うことができ、超人の認識に達すると説いた。
- ③ ユーモアを忘れずに生きる人間は、自らが陥った苦しみやつらさを笑いによって紛らわすことで自己崩壊を免れる。
- ④ 人間にとって笑いは、自己を守り力強く生きていくために不可欠である点で、人間の実存に関わるものといえる。
- ⑤ 世の人々は、社会で自己を束縛し虐げる社会や体制を笑い飛ばし、広く反抗心を呼び起こすことが求められている。

二

問題文を読んで次の問1～問九に答えなさい。解答はすべて楷書で所定の解答用紙に記入しなさい。

植物の進化にとって、「種子」というのは、画期的な存在である。

種子は固い皮で守られているため、乾燥に耐えることができる。そして、種子の中に守られていれば、植物の芽は、いつまでも発芽のタイミングを待ち続けることができるのである。植物は水がないと死んでしまうが、種子は水がなくても、水が得られるようになるまで、長い時間待ち続けることが可能だ。よく長い時を経て見つかった種子が芽を出したとニュースになることがあるが、種子は時間を越えることのできるタイムカプセルである。そして、長時間、維持されるということは、その間に長距離を移動することができる。種子というタイムカプセルは、時間と空間を越えていくことができるのである。

このように種子植物には、花粉と種子という二回の移動のチャンスがある。植物は、この限られたチャンスにすべてを賭けている。そのため、花や種子は、植物の **A** の見せ所なのだ。

とはいえ、種子は、花粉に比べると、ずっと重たく大きい。この種子を遠くへ運ぶというのは、なかなか大変そうである。植物は、⁽¹⁾どのようにして種子を移動させているのだろうか。

たとえば、紙を丸めた紙くずを想像してみよう。この紙くずを目の前に捨てるのではなく、どこか遠くへ持っていきたいが、どうやって遠くへ移動させれば良いだろうか。とりあえず、遠くへ投げってみるというのも良いだろう。紙を広げて紙飛行機を折れば、風に乗って、もっと遠くまで飛ばすことができるかも知れない。もし、川が流れているならば、水に^(a)ウクものに乗せて流してしまうという方法もあるだろう。あるいは、トラックが近くを通ったとしたら、荷台に投げ入れてしまうという方法もある。そうすれば、トラックの行き先まで紙くずは運ばれていくことだろう。

遠くへ移動させたいこの紙くずが、植物にとっては種子のようなものである。

種子を遠くへ移動させるアイデアも、そんなに数があるわけではない。植物の種子の散布方法はD1からD5の五つに分かれ

ている。D1は風や水の力で種子を運ぶ方法である。この方法は、風散布や水散布と呼ばれている。D2は人や動物に付着するという方法だ。この方法は、動物散布と呼ばれる。D3は自らの力ではじけ飛ぶ方法である。この方法は、機械散布と呼ばれる。D4は特別な仕組みはなく、ただ落下するだけの方法で、重力散布と呼ばれる。もともと、特別な仕組みはなくても小さな種子が風に運ばれたり、動物の毛にくっついたりするなど、すべての種子は何らかの移動を行っていて、人間がただそれに気が付いていないものが、D4に分類されているという意見もある。D5は種子を作らない植物である。こうしてみると、種子散布方法は五つに分類されているものの、現実的には、D1からD3までの、たった三つの方法しかないということがわかる。

D2の動物散布というと、人間の衣服や動物の毛について移動するというのが一般的だが、なかなか凝った方法もある。一つはアリに種子を運ばせるという方法だ。

たとえば、スミレの種子には「エライオソーム」という栄養豊富な物質が付いている。そして、アリはこのエライオソームを餌とするために種子を自分の巣に持ち帰るのだ。こうしてスミレの種子はアリに運ばれていくのである。しかし、アリの巣は地面の下にある。地中深くへと持ち運ばれただけでは、スミレの種子は芽を出すことができない。もちろん心配は無用である。アリがエライオソームを食べ終わると、種子が残る。この種子はアリにとつては食べられないゴミなので、アリは種子を巣の外へ捨ててしまうのだ。このアリの行動によってスミレの種子はみごとに散布されるのである。

他の例もある。オオバコは、道ばたやグラウンドなど踏まれる⁽²⁾ところに生える雑草の代表である。このオオバコの種子は、紙おむつに似た化学構造のゼリー状の物質を持っていて、雨が降って水に濡れる^(b)と膨張して粘着する。その粘着物質で人間の靴や、自動車のタイヤにくっついて運ばれていくのである。もともとオオバコの種子が持つ粘着物質は、乾燥などから種子を保護するためのものであると考えられている。しかし **B** に、この粘着物質が機能して、オオバコは分布を広げていくのである。^(c) ホソウ^(c)とソウ^(c)されていない道路では、どこまでも、^(d)轍^(d)に沿ってオオバコが生えているのをよく見かける。オオバコは学名を「プランター

「ゴ」と言う。これはラテン語で、「足の裏で運ぶ」という意味である。また、漢名では「車前草」と言う。これも道に沿ってどこまでも生えていることに由来している。こんなに道に沿って生えているのは、人や車がオオバコの種子を運んでいるからなのだ。こうなると、オオバコにとって踏まれることは、耐えることでも、克服すべきことでもない。踏まれなければ困るほどまでに、踏まれることを利用しているのである。道のオオバコは、みんな踏んでもらいたいと思っ**て**いるはずである。まさに逆境をプラスに変えているのだ。

このように人に踏まれて増えていくという雑草もある。人が集まる都会に生える雑草には、種子がでこぼこして、靴底に付きやすい構造をしているものも多い。私たちもまた、こうして知らぬ間に雑草の種子散布に協力しているのである。

植物は、こうして工夫を重ねて種子を移動させている。しかし、⁽³⁾そもそもどうして種子を遠くへ運ばなければならないのだろうか。種子を移動させる理由の一つは分布を広げるためである。

それでは、どうして分布を広げなければならないのだろうか。親の植物が種子をつけるまで生育したということは、少なくとも **C** ではないだろう。わざわざ別の場所に種子が移動しても、その場所で無事に生育できる可能性は小さい。そんな一か八かのために、種子をたくさん作って、散布するよりも、子孫たちも、その場所で幸せに暮らした方が**良い**のではないだろうか。植物は、大いなる野望やボウケン心^(d)を抱いて種子を旅立たせるわけではない。環境は常に変化をする。植物の生える場所に安住の地はない。常に新たな場所を求め続けなければならないのだ。そして、分布を広げること^(e)を怠った植物は、おそらくは滅び、分布を広げようとした植物だけが、生き残ってきたのである。それが、現在のすべての植物たちが種子散布をする理由である。常に挑戦し続けなければいけないということなのだ。

何かをするということは、失敗することである。たとえば、旅に出れば、バスに乗り遅れたり、道を間違えたり、忘れ物をしたりする。部屋の中にいれば、何も失敗することはないが、それでは面白くない。旅に出て失敗しても、後になってみれば良い思い出だ。チャレンジすることは、失敗することである。しかし、チャレンジすることで変わることができる。「Challenge &

Change (チャレンジしてチェンジする)」である。雑草だって、スマートに成功しているわけではない。道ばたで泥臭く挑戦している姿を見てほしい。

さらに、種子がさまざまな工夫で移動をする理由は、他にもある。それは、親植物からできるだけ離れるためなのである。親植物の近くに種子が落ちた場合、最も脅威となる存在は親植物である。親植物が葉を繁しげらせば、そこは日陰になり、やつと芽生えた種子は十分に育つことはできない。また、水や養分も親植物に奪われてしまう。あるいは、親植物から分泌される化学物質が、小さな芽生えの生育を抑えてしまうこともあるだろう。残念ながら、親植物と子どもの種子とが必要以上に一緒にいることは、むしろ弊害の方が大きいのだ。そこで植物は、大切な子どもたちを親植物から離れた見知らぬ土地へ旅立たせるのである。まさに「かわいい子には旅をさせよ」、植物にとつても大切なのは親離れ、子離れなのである。

(稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』による。出題の都合上、一部改変した箇所がある)

問一 傍線部(a)・(c)・(d)の片仮名を漢字にしなさい。

(配点6点)

- (a) ウク
- (c) ホソウ
- (d) ボウケン

問二 傍線部(b)・(e)の漢字を平仮名にしなさい。

(配点4点)

- (b) 粘着
- (e) 怠

問三 空欄 A に入る最も適当な言葉を、本文中から二字で抜き出しなさい。

(配点3点)

問四 空欄 B・C に入る最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を記入し

なさい。

(配点4点)

B

- ① 主観的
② 結果的
③ 画期的
④ 能動的
⑤ 対比的

C

- ① 移動できない場所
② 踏まれることがない場所
③ 分布を広げられない場所
④ 生育が抑えられない場所
⑤ 生存できない場所

問五

傍線部(1)「どのようにして種子を移動させているのだろうか」とあるが、具体的にどのように移動させているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 現実的には三つの方法の中で、植物それぞれに最適な方法を取り、自らの力や、他の何らかの力を借りることで種子を遠くに移動させている。
- ② 乾燥に耐えられるという種子の能力によって、長い時間待ち続け、時間と空間を超えて水が得られる場所へと移動させている。
- ③ 人間にとっては考えられないほどの多くの手段を用いて、分布を広げるために自らの生存に適した場所を求めて移動させている。
- ④ 植物の種子の散布方法は五つに分類されるが、それ以外にも人間が気が付かないような特別な仕組みを用いて移動させている。
- ⑤ 人間の衣服や動物の毛について移動するというのが最も一般的で、特殊な物質を用いて種子を運ばせて移動させているものもある。

問六

傍線部(2)「踏まれるところに生える雑草」とあるが、このような雑草はなぜ踏まれるところに生えるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 雑草の種子には雨が降って水に濡れると膨張して粘着する物質があり、人や車に踏まれることによって種子を移動させているから。
- ② 人が集まる都会に生える雑草はみな、野山に生える雑草とは違い、人間に踏まれることを利用して種子を移動させる方法を取っているから。
- ③ 種子が持っている仕組みとして人間の靴などにくっついて種子を移動させるという、人に踏まれて増えていく方法を取っている雑草であるから。
- ④ 乾燥などから種子を保護する粘着物質を持ち、踏まれることに耐え、踏まれることで耐久力がより強くなる雑草であるから。
- ⑤ 都会に生育する雑草は、種子を移動させるために機械散布の方法を取ることができず、踏まれることで移動する方法を取るしかないから。

問七

傍線部(3)「そもそもどうして種子を遠くへ運ばなければならぬのだろうか」とあるが、植物が種子を移動させる理由を、六〇字以内で説明しなさい(句読点を含む)。(配点10点)

問八

傍線部(4)「植物にとっても大切なのは親離れ、子離れなのである」とはどういうことか。その説明として正しくないものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 親植物が現在生えている場所がいつまでも生育に適した場所である保証はないため、子孫である種子をできるだけ離れた場所に移動させることが大切であるということ。
- ② 失敗する可能性があるとしても、種子散布で親の植物から離れることに挑戦したほうが、子が生き残ることにつながり、大切であるということ。
- ③ 親植物から離れた見知らぬ土地に移ることで、子が新たな環境に適応し、それまでにない性質を身につけられるようになることが大切であるということ。
- ④ 親植物の近くは日当たりが悪く、水や養分を親の植物に奪われてしまうことがあるため、子が生育する環境を別に求めることが大切であるということ。
- ⑤ 植物にとって親植物と子どもの種子とが必要以上に一緒にいることは子がダメージを受けることにつながるため、親子の分離が大切であるということ。

問九 本文の内容と一致するものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点6点)

- ① 植物の進化にとって「種子」というのは画期的な存在であり、唯一の移動のチャンスであるこの種子に、植物はすべてを賭けている。
- ② すべての植物は種子を移動させるためにそれぞれ特別な仕組みを持っていて、環境の変化があっても生き残ることができるようになっていく。
- ③ 雑草と呼ばれる植物の中には、人間にとっては苛酷とも思える環境を逆手に取って種子を移動させずに生き残っているものもある。
- ④ 人間がいくら抜いても分布を広げる雑草であっても、スマートに成功しているわけではなく、野望を抱いて泥臭く挑戦しているのである。
- ⑤ 植物が、大切な子どもたちである種子を自分から離れた見知らぬ土地へ旅立たせるのは、将来的な生き残りを賭けているからである。